

主は共にいる

ヨシュア記 一章一節—九節

マタイによる福音書 二八章一六節—二〇節

二〇一〇年五月二十三日礼拝説教 秋吉隆雄 牧師

今日は聖靈降臨日、ペントコステです。イエス・キリストの弟子たちがひとつ所に集まっていると、突然激しい風が吹いてきて、一人ひとりの上に炎のような舌が現れて留まりました。それが聖靈で、弟子たちは与えられた聖靈に押し出され、神の偉大な業について語りました。それは、「あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさつたのです」というメッセージでありました。「ナザレのイエスは、キリスト・救い主である。」このメッセージを受け入れた時に、彼らは言葉の通じ合う、すなわち心が通じ合う信仰共同体を形成しました。聖靈降臨日は、イエスをキリストと信ずる信仰が与えられ、その信仰によつて最初のエルサレム教会が誕生した記念日であります。聖靈はその後、いつの時代も豊かに与えられ、聖靈によつて信仰が育まれ、導かれてまいりました。

その聖靈降臨日に与えられた御言葉は、旧約聖書のヨシュア記一章であります。ここは、モーセの死後、後継者としてヨシュアが神によつて立てられた箇所であります。今日はこの聖書から申し上げたいと思います。

まず、モーセの死から申し上げたい。モーセは、エジプトで奴

隸であつたイスラエルの民を導き出して四十年間荒れ野をさまよい、神が与えてくださつた乳と蜜の流れるカナンの地に導き上つた人で、旧約聖書の中で、最大の功績者であります。モーセほど忍耐強く、苦労した人はいないと思ひます。イスラエルの民はいつも目の前の苦労を嘆いて、モーセに不満をぶちまけています。この民を率いて四十年間荒れ野を旅したわけです。四十年といつても三十数年間はカデシュ・パルネアという所に留まっていますけれども、荒れ野でのモーセの苦労は並大抵ではなかつたと思ひます。そして、いよいよ約束の地カナンに入る。その時に神様は、モーセをピスガの山頂に連れ出して約束の地カナンを見渡させます。目の前に豊かなカナンが広がつています。今からその地に入る。この時に神様はモーセに言います。「これがあなたの子孫に与えるとわたしがアブラハム、イサク、ヤコブに誓つた土地である。わたしはあなたがそれを自分の目で見るようとした。あなたはしかし、そこに渡つて行くことはできない。」神様は約束の地をモーセの目の前に見せたわけです。しかし、「そこにあなたは入れない」と言つています。こんな残酷なことがあるでしょうか。あれだけ苦労して、やつとたどり着いた時に「あなたはしかし、そこに渡つて行くことはできない」と言うのです。

なぜモーセはカナンに入れなかつたのか。出エジプト記では、こう書いています。レフイディムで、水に渴いた時、民はモーセに反抗します。その時にモーセは、神様の命令に従つて持つていた杖で岩を叩く。するとその岩から水が出て、民は渴きから救わ

れだと記されています。次に民数記では、カデシユで同じように水に渴きます。民はモーセに対して、「われわれを家畜と一緒に死なせるために荒れ野に導き上ったのか」と迫りました。神様はモーセに対して「岩の前に立って水を出せと命じなさい」と言われます。ところがモーセはこの時に、レフィディムの時と同じように杖で岩を二度叩いたのです。そうすると、水がほとばしり出ました。しかし神様は、モーセと兄アロンに対して「あなたたちはわたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを示さなかつた。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない」と語りました。岩を叩くのではなく、「水を出せと命じなさい」と言されました。しかし、モーセは神の命令に反し、岩を叩きました。それが、モーセの神への不信仰という罪であり、それゆえに、カナンに入ることができなかつた。これが一つの解釈です。

しかし、一般的に言われていることは、イスラエルの民は、これまで数知れない神への不信に陥つてきました。モーセはその民の罪を背負つてカナンに入ることができなかつた。申命記には、「しかし主は、あなたたちのゆえに、わたしに向かつて憤り、祈りを聞こうとされなかつた」と記されています。あなたたち、イスラエルの罪のゆえに、カナンに入ることができない。イエス・キリストの十字架のように、モーセは民の罪を代わりに受けたという理解です。この解釈は納得できるように思います。

けれども、私はもう一つ理由があつたと考えています。モーセ

がもし先頭に立つてカナンに入つたならば、人々はモーセのこと
を神様のように崇めたでしょう。しかし、この出エジプトの大事
業はモーセがしたことではない。神様の導きの中で、神の力で達
成された。神様は、このことを教えるために、モーセをあえてカ
ナンに入れなかつた。私はそう信じています。これは、モーセに
とつては残酷な話です。けれども、神信仰というのは、人間が支
配するのではなくて、神が支配しておられる。この神の支配の前
に自分を空しく捨てる。これが生ける神信仰です。モーセは死ん
だ時に百二十歳で、目はかすまず、活力も失せていなかつたと記
されています。体力はあつたけれども、カナンに入れなかつた。
しかもモーセの葬られた場所は誰も知らなかつたと書いてあります。出エジプトはモーセがしたのではない。神の業である。この
神信仰のメッセージが、モーセがカナンの地に入れなかつた決定
的な理由であろうと、私は考えています。それで、モーセは自ら
を空しくして死んでいった。これがモーセの最期です。

モーセの死後、後継者としてヨシュアという青年が立てられて
きます。なぜヨシュアが立てられたのか。モーセにはゲルショム
という息子がいます。神は、血筋を引く息子ゲルショムではなく、
ヨシュアを選びました。これにも理由があります。カナンに入
る時に、モーセはカナンの地を偵察する必要性があると考えまし
た。モーセはイスラエル十二部族の中から一人ずつ十二名の指導
者を出させます。その十二名に、カナンがどんな町で、どんな人
がいて、どんな生活をしているかを探らせます。四十日間、苦難

の四十日です。彼らは斥候、スパイとしてカナンの地を行き巡ります。そして、彼らは帰つてきて報告します。「カナンの町は城壁が高くて丈夫だ。住んでいる人も背が高くて自分たちはイナゴのように思えた。そして生活も豊かでこんな大きな果実が実つていた」と果実を見せます。「自分たちの力ではとてもカナンに入つていくことはできない」と報告したのです。彼らは、今日で言うならば難民のような人たちでありますから、本当に力のない群れです。その群れが、文明の高いカナンに入るということは無理なわけです。この報告を聞いたイスラエルの民は、みな泣いて悲しみ、嘆きます。ここまで来てカナンに入ることができない。強力な民族の住む豊かな町に侵入することは不可能だと思わされたからです。ところがこの時に、ヨシュアとカレブという二人の青年は、「たしかにあそこの民は強力で素晴らしい、町は豊かである。けれども、我々が神の御心に適うならば、主は我々をあの土地に導き入れ、乳と蜜の流れる土地を与えてくださる」と報告するのです。これを聞いて、否定的な報告をした十人の者たちは、ヨシュアとカレブに対して「調子のいいことを言うな。お前たちの報告は現実的ではない」と石を投げて殺そうとさえしました。

ヨシュアは、「神様の御心に適うなら、神がこの地を与えてくださる」と報告しています。ヨシュアは神を信じたのです。神に従うなら、約束の地が与えられると信じる信仰に立つて進もうと民に進言しました。この信仰がヨシュアをモーセの後継者として立てさせたのです。今日の御言葉をもう一度ご覧いただきたいと思いました。

ます。一章一節から九節までお読みします。

「主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシュアに言われた。『わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立つてヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てる事もない。強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行つても成功する。この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行つてもあなたの神、主は共にいる。』

お分かりになると思います。モーセの死後、ヨシュアが立たされました。イスラエル民族の生存がヨシュアの肩に懸かつたので

す。ヨシュアが間違えば、民族は絶滅していきます。ヨシュアが

成功すれば、乳と蜜の流れるカナンに入ることができます。神様は「あなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える」、そして「あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう」と言っています。神が、「モーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すこととも、見捨てる事もない。強く、雄々しくあれ。」「わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行つても成功する。」神様の律法、戒めを「昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい」、「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行つてもあなたの神、主は共にいる。」

G o d i s w i t h y o u. です。これがヨシュアに与えられた神からの励まし、そしてヨシュアの人生の確かさです。ヨシュアは震えたでしょう。その震えるヨシュアに対して、神様はこの言葉をもってカナン侵入へと力づけていった。これが今日の聖書です。

私は、今日のこの御言葉に深い思い出があります。私は高校三年生の秋ごろから教会に行つて、その年のクリスマスに洗礼を受けました。洗礼を受けると言つた時に、両親は喜んでくれました。洗礼を受けてクリスチヤンになれば、自殺することはないだろうと思つたからだと思います。けれども、私が「神学校に行つて牧師になる」と言つた時に、両親、特に父親は大反対でした。「牧

になるならば一切の協力はしない」と言いました。私は「結構です」と思いました。神学校は、洗礼を受けて一年以上教会生活をしていないと受験資格はないのです。私は受験資格がないものですから、一年、浪人を決めました。そして、一年間アルバイトをしてお金を貯めて、神学校の入学に備えました。朝は新聞配達、昼はその新聞の集金、夜は二年後輩の高校生の家庭教師をしました。一年後、神学校の入学が許され、明日上京するという日、私は牧師にお別れの挨拶をするために教会を訪ねました。その時に、牧師はまさに今、読んだ聖書を読んで祈つてくださいました。私は、その時本当に励されました。ヨシュアは、民族の生存が懸かった大事業であったのに対し、私の場合は、独力で六年間神学校生活をして牧師になれるかどうかという、個人的な小さな業です。けれども、私にとっては今日の御言葉、「強く雄々しくあれ。うるたえるな。おののくな。あなたの神、主は共にいる」は、本当に大きな励ましでした。忘れもしませんが、入学していろいろなもの、学費とか寮費とかを支払った後、残ったお金は八千円ぐらいでした。その八千円のお金を見て、「これから私はどうなるんだろうか」と思いました。けれども、とにかく六年間の神学校生活を終えて、曲がりなりにも牧師になることができました。これは五十年前ですから、こういうことができたと思うので、今の時代はこんなことはできないのではないかと思います。神学生時代は、たしかに苦労もありました。アルバイトが忙しくて、勉強する時間がない。アルバイトの行き帰りの電車の中が私の勉強の場

でした。けれども、六年間の神学校時代には楽しい自由な生活を満喫したと思っています。

牧師になることは易しいのです。少し勉強すれば、誰でも牧師になります。けれども、「牧師である」ことは大変困難です。私の神学校生活、そしてその後の牧師になつてからの生活の中で、しばしば今日の御言葉を思い出しました。母教会の牧師が、この箇所を読んで祈つてくださいました。それは私にとって、いつも大きな支えになつてきました。そういう意味で、今日の御言葉は大変印象深いのです。

ところで、今日は聖靈降臨日です。聖靈が与えられ、イエス・キリストを信じる最初のエルサレム教会が誕生した日です。その日に今日の聖書が与えられました。なぜ、この日にこの聖書なのか。それはこういうことではないでしょうか。わたしたちは神様を信じていますが、神様を目で見ることはできません。ヨハネによる福音書一章一八節に、「いまだかつて、神を見た者はいない」とあります。神を見た人はいません。もし、「見た」と言うならば、それは相対化したものですから、神ではありません。神様は見えないので。けれども、神の独り子イエス・キリストは、聖書を通して私たちに知らされています。イエス・キリストの言葉と業、人間への無限の愛を知らされて、わたしたちは熱い思いにさせられます。

イエス・キリストは、聖書の証言に従うならば、天に昇つて神の右、祝福を約束する右の座に座つて、わたしたちを神様に執り

成してくださっています。神の右という遠い所にイエス・キリストは帰られました。わたしたちは今、神様とイエス・キリストと直接親しく交わるのですけれども、それを可能にしてくださったのが聖靈です。イエス・キリストは天に帰られた。あとはすべて聖靈がわたしたちに信仰を与え、聖靈を通して信仰を導いてくださいます。今のわたしたちの時代は聖靈の働く「聖靈の時代」です。聖靈降臨によつて、イエスがキリストであると示されて信じました。その同じ聖靈がわたしたちにも与えられ、このようにイエス・キリストを信じる者とさせられています。聖靈の働きが、わたしたちの信仰生活のすべてであります。聖靈がわたしたちに「主はあなたと共にいる。」このことを日々示してくださっています。聖靈によつて「主が共にいる」ことを確認する。このことが、今日の御言葉が与えられた意味であろうと私は理解しています。モーセの死後、若いヨシュアは畏れをもつて後継者になつていつたことでしょう。一つ間違えば、民族の絶滅です。震えたでしょう。そのヨシュアに対し、「強く雄々しくあれ。うろたえるな。おののくな。わたしはあなたと共にいる。」この神様の御言葉がヨシュアの支えでありました。私の小さな信仰生活においても、「主が共にいる。」私は右に外れ、左に反れましたけれども、それでも神様はイエス・キリストと共にいてくださった。そう信じています。人は愛する友に恵まれている時は、本当に幸いです。けれども、人間存在の根本は孤独です。誰からも助けてもらえない、一個人きりになる時があります。その孤独の中で「主が共にいてくだ

さる」と、聖靈によって確証されている。このことを信じる時に、その信仰は本当に深い支えです。これは、わたしたちの生きるとの「確かに」です。聖靈がそのような「確かに」をわたしたちに約束してくださいます。

聖靈降臨日、ペントコステの今日、「主が共におられる」ことを今一度確かにこととするヨシュア記一章を与えられました。「主は共にいる」。この言葉を覚えて、信仰生活を「一緒に励んでいきたいと示されます。お祈りを捧げます。

神様、聖書の御言葉、本当にうれしく思います。モーセ亡き後、ヨシュアが後継者に立てられました。ヨシュアはどれほど不安の中に立つたことありますか。そのヨシュアに対して、「モーセに命じた律法を守れ、そうすれば必ずカナンの地に導き上る」、いつも、どんな時にも、「わたしがあなたと共にいる」と神様が確かな約束をしてくださいました。これがヨシュアをカナンに導き上らせた大きな力、支えがありました。わたしたちは、立場は違いますけれども、不安に襲われる時に、聖書を通して、聖靈を通して「主が共にいてくださる」ということを教えられます。この時に、わたしたちは本当に大きな安らぎ、そして大きな勇気が与えられて、前に向かうことができます。どうぞ聖靈によつて、いつも「主が共におられる」ことを信じて進むことができますように、わたしたちを祝福してください。聖靈降臨日に与えられた同じ聖靈が、わたしたちに今も与えられています。この聖靈に身を委ねながら、信仰生活を励むことができますようにお支えください。

わたしたちの教会の上に祝福がありますように。この時代の苦しみの上に、あなたの大きな癒しと望みが示されますように心から祈ります。感謝と願い、キリストの御名によって御前にお捧げ申し上げます。アーメン

引用文献

聖書 新共同訳、日本聖書協会、一九八七年九月

讃美歌21、日本基督教団出版局、一九九七年四月